

能性が推測された。本法の痴呆患者における診断的有用性についてはこれまで多くの報告がなされ、診断マーカーとしての可能性も期待されている。本検討からアルツハイマー型痴呆の病初期、特に健忘症候のみを呈する時期の診断にも非常に有効であることが示唆され早期診断としての意義が高いと考えられた。

14. 聴神経腫瘍における脳血流シンチグラフィの検討

玉本 文彦 白石 昭彦 桑島 賢介
京極 伸介 白形 彰宏 住 幸治
片山 仁 (順天堂浦安病院・放)

聴神経腫瘍は小脳橋角部腫瘍として、その増大とともに早期に中小脳脚を圧排する傾向がある。今回、われわれは7例の小脳橋角部腫瘍(聴神経腫瘍6例、神経膠腫1例)の中小脳脚への圧排が、小脳半球の循環代謝に及ぼす影響について、脳血流シンチを用いて検討した。7例中3例で中小脳脚の圧排があり、すべて腫瘍と同側の小脳半球で循環代謝が低下した。血管造影上は両側小脳半球の血流に差はなかった。圧排のない4例中3例では、両側小脳半球に循環代謝の左右差はなく、血管造影上も異常はなかった。小脳橋角部腫瘍が同側の小脳半球の循環代謝低下をきたすメカニズムとして、皮質橋小脳路が中小脳脚部で障害を受けたための diaschisis 現象が想定された。

15. ^{99m}Tc -PAO による脳血流シンチグラムを施行した Cortical Heterotopia の一例

村田晃一郎 岩田 雅己 小林 剛
(北里研究所メディカルセ病院・放)
風張真由美 真銅 太郎 石館 武夫
(同・小児)

症例は、入眠後の両上肢を中心とした強直性痙攣にて来院した13歳女児。精神運動発達遅延あり。脳波は広範な S & W と、BURST がみられた。CT では左頭頂後方から側脳室に達する大脳皮質と同じ CT 値を持つ限局性の異常像、石灰化なし。増強効果なし。MRI では、左大脳半球の皮質側から内方に向かい側脳室上衣に達する異所性皮質を認め Cortical Heterotopia と診断した。キアリ奇形の合併も認めた。脳血流シンチでは病変部に一致して集積増多があり、異所性皮質には健常皮質と同

等の血流が保たれている可能性が示唆された。

16. 異所性灰白質の1例

竹政 和彦 小林 剛(都立広尾病院・放)

異所性灰白質を有する症例に ^{123}I -IMP を用いた脳血流 SPECT 検査を行い、有用な結果を得たので報告した。

異所性灰白質は、胎生期における神経芽細胞の遊走障害により生じる先天異常である。これは通常てんかん発作や精神発達遅延などを持つ小児に見られる疾患であるが、われわれの経験した症例の主訴は抑うつであり、てんかんの既往や知能低下を持たない中年女性であった。

CT と MR で両側の側脳室外側に対称性に灰白質の存在が認められ、異所性灰白質が考えられた。

^{123}I -IMP を用いた脳血流 SPECT 像では、両側の側脳室外側に血流増加領域を認めた。左右対称に血流増加を示す疾患は少なく、本例のような異所性灰白質は脳血流検査で診断が可能であると考えられた。

17. ヨード標識脂肪酸を用いた急性心筋梗塞急性期における viability 評価

橋本 順 久保 敦司 塚谷 泰司
橋本 省三 (慶應大・放)

急性心筋梗塞6例に ^{123}I -BMIPP, $^{201}\text{TlCl}$ を急性期とその後の2回ずつ安静時に投与し、所見の乖離の有無および経時的变化を検討した。

急性期において脂肪酸代謝と血流の明らかな乖離がなく、その後の投与においても急性期と所見に大きな変化のない例では、経時的な EF の改善、負荷タリウム再分布が見られなかった。急性期において血流が保たれているものの、代謝が障害されている部分の存在を示唆する代謝と血流の乖離を認め、その後の投与において代謝障害の改善にともない乖離の減少している例では、EF の改善するものが多く、負荷 TI において再分布所見を呈し、viable な心筋の存在を示唆しているものと考えられた。

BMIPP は TI と併用することにより、急性心筋梗塞急性期において運動負荷を行わずして心筋の viability、ならびに予後を評価できる点で有用な薬剤となることが期待された。